

国文学研究における発表メディアの特徴

The Characteristics of Publications  
in the Field of Japanese Literature

真 弓 育 子  
*Ikuko Mayumi*

*Résumé*

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of publications in the field of Japanese literature.

On the basis of results of a case study of 13 researchers of Japanese literature, 202 books and 223 journal articles are analyzed to verify the difference in the average age of researchers publishing each publication.

The results are as follows:

- (1) the average age of researchers publishing books is 54.4, those publishing journal articles is 48.7, the difference being approximately 6 years;
- (2) the average age of researchers publishing articles in university bulletins is 50.0, articles in bulletins of the school of Japanese literature is 47.3, articles in journals of learned societies is 48.9, and articles in journals of commercial publishers is 46.7. The greatest difference in average age is 4 years between university bulletins and journals of commercial publishers.

Based on these findings, this paper examines how the characteristics of these publications reflect the difference of the average age of researchers publishing each publication.

- I. 研究成果発表の場としてのメディア
- II. 国文学研究における発表メディアに関する調査 1: ケーススタディ
  - A. 調査方法
  - B. 調査結果
  - C. ケーススタディにおける主要な結果
- III. 国文学研究における発表メディアに関する調査 2: 全体調査
  - A. 調査方法

---

真弓育子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程，東京都港区三田2-15-45  
Ikuko Mayumi: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, Mita, Minato-ku, Tokyo.

## B. 調査結果

### C. 各発表メディアにおける発表時点での研究者の平均年齢の差

## IV. おわりに

### I. 研究成果発表の場としてのメディア

研究者は、その研究活動を通じて、学術情報を発表したり、利用したりするために種々のメディアを用いる。図書、雑誌論文、会議録、テクニカルレポート等の種々のメディアの中から、どのメディアをどの程度用いるかは、研究者が属する研究分野によっても、あるいは、研究活動の場面によっても異なると考えられる。

従来のメディアに関する研究は、主として情報利用という場面でのものであった。すなわち、研究者が研究のために情報利用する場合に、どの様なメディアを用いているかについて、直接研究者に問い合わせを行なった（user study）、引用文献や図書館での利用記録を分析すること（引用文献分析など）によって間接的に調査するものであった<sup>1)</sup>。

また、メディアに関する研究が、自然科学分野を対象とするものが多く、従って、自然科学分野の代表的なメディアである雑誌が、主として分析の対象となってきた。

そこで、今回の調査では、メディアを情報利用の観点から捉えるのではなく、研究者がその研究成果を発表する場として捉えることにした。また、調査対象は、人文科学分野の中から選ぶことにした。

人文科学分野におけるメディアを扱った研究として、CRUSの調査がある<sup>2)</sup>。この調査では、対象として、言語（“English”，“French”を合わせて、全体の約52%）、歴史、哲学、音楽を選び、各分野を研究する大学の教員と院生（Ph. D student）に質問紙票を送付している。この調査結果のひとつとして、教員が研究成果を発表するメディアに関するデータが示されている。すなわち、研究成果をすでに発表したメディアとして、全体の約35%が雑誌論文、約20%が図書を用いていたことが明らかにされている。

しかし、CRUSの調査は、主として人文科学者の情報利用（特にBLRDでの利用）について行なわれたため、発表メディアに関する詳しい調査は含まれていない。

また、人文科学分野は広い範囲にわたるものとして、そのすべてについて調査する意図がないとしているが、当該分野の代表ともいえる文学研究についても調査すべ

きであったと言えよう。

そこで、本調査は人文科学分野の中から国文学研究を対象として選び、以下のような段階を追って、国文学研究における発表メディアの特徴を明らかにする。

- ① 国文学研究者の中から、研究歴の長い研究者を選び、個々の研究者が用いた発表メディアについて調査する（ケーススタディ）。
- ② 上記のケーススタディの結果、発表メディアの特徴として考えられる点について、国文学研究文献全体を対象として調査する（全体調査）。

## II. 国文学研究における発表メディアに関する調査 1：ケーススタディ

国文学研究における発表メディアに関する調査は、まったく行なわれていないといっても過言ではない。そのため、国文学研究全体を対象とした調査を行なうには、あまりにも情報やデータが不足している。そこで、調査1では、国文学研究者について個別調査を行ない、国文学研究における発表メディアの特徴について、その手がかりをつかむことを目的とした。

### A. 調査方法

国文学研究資料館所蔵の古稀記念、退官記念の論文集を収集し、その中から当該研究者の著作研究文献が網羅的に集められ、その書誌事項が詳しく記載されていた13件を対象とした。各研究者について、その著作や研究文献の件数を発表メディアごとにまとめ、さらに研究者の年齢を指標として分析した。

### B. 調査結果

調査対象となった13名に関する個別のデータを示したものが第1表である。13名のうち半数以上が明治生まれで、残りも大正前半に生まれている。従って、大戦の影響を全員が受けていることになるため、その時点での変化を考慮に入れる必要がある。対象となった研究歴の範囲は、20歳代から60歳代が多く、約40年間の研究活動を見ることができた。特に、研究者AとEは、52年間の研究歴を調査することになった。各研究者の発表件数には、ばらつきがあるが、研究歴が長いほど発表件数

第1表 研究者に関する個別データ一覧

研究者	生 年	研究歴の範囲*		活動年数	出版した**	執筆した***	図書を初めて	雑誌論文を初めて
		年	才		図 書 数	論 文	出版した年令	執筆した年令
A	1892	27	— 78	52	81	217	38	27
B	1901	28	— 77	50	46	88	29	28
C	1902	20	— 64	45	58	80	25	20
D	1904	28	— 64	37	14	47	46	26
E	1906	21	— 72	52	114	151	25	21
F	1909	26	— 63	38	70	120	27	26
G	1910	24	— 62	39	14	63	33	24
H	1912	19	— 69	51	20	46	23	19
I	1913	24	— 63	40	37	72	30	24
J	1913	28	— 64	37	21	48	37	28
K	1913	33	— 69	37	5	71	35	33
L	1914	25	— 62	38	22	44	26	25
M	1918	22	— 62	41	16	54	26	22

\* 各記念論文集の著作文献目録が収録していた研究歴の範囲である。従って、その後の研究活動は含まれていない。

\*\* 編集を担当した図書は含まない。

\*\*\* 研究会誌，同好会誌，記念論文集は含まない。

が多いとは、一概に言えないことがわかる。但し、研究者AとEは、活動期間も長く、発表件数も他の研究者と比べて非常に多くなっている。最も発表効率の高いのは研究者Fで、38年間に図書70冊、雑誌論文120件を発表している。発表図書数で最も少ないのは5冊であるが、雑誌論文数は最も少ない場合でも44論文を発表している。

1. 図書と雑誌論文各々の発表最盛期

ここでは、研究者の年令を指標として、各年代ごとの発表図書数、雑誌論文数を調べた。まず、研究者別に、最も図書、論文を多く発表した年代（発表最盛期）を示したものが第2表である。この表をもとに、研究者を2グループに分けた。Aグループは、図書と雑誌論文の発表最盛期が同年代である研究者をあつめたものである。一方、Bグループは、最盛期の年代が、図書と雑誌論文とは異なる研究者をあつめたものである。

Aグループ（第1図）のうち、研究者J, M, K, Lは、

第2表 研究者別図書・雑誌論文発表の最盛期

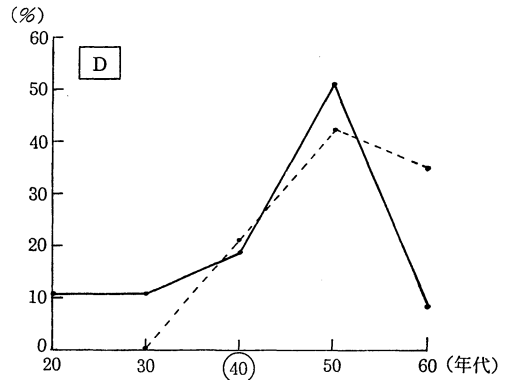
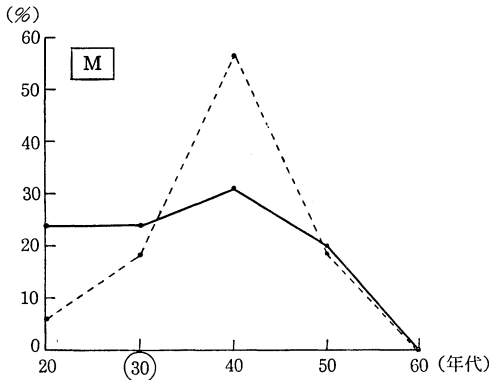
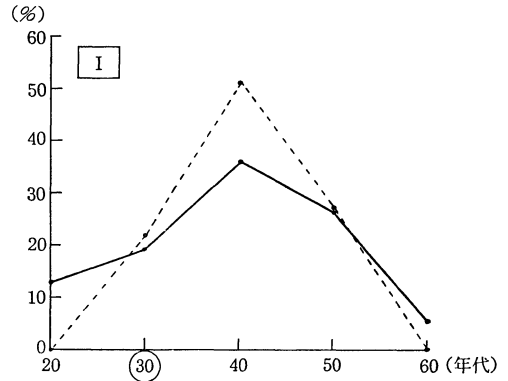
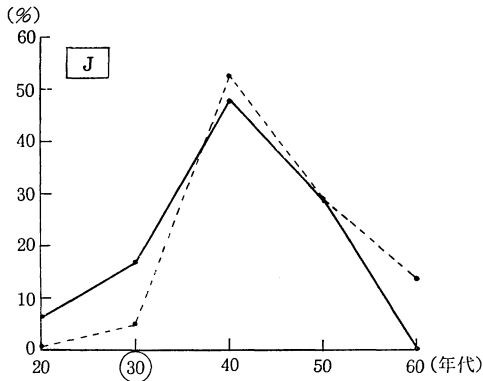
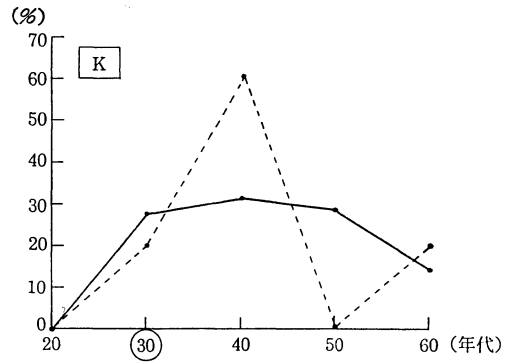
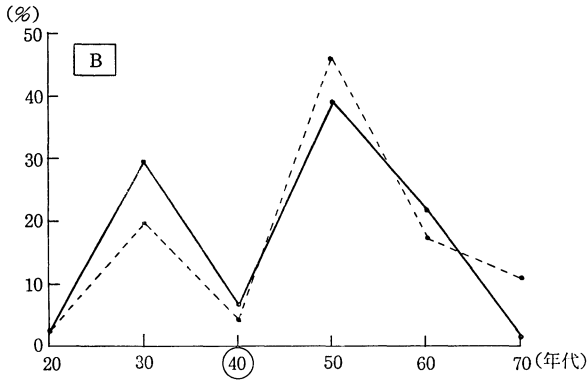
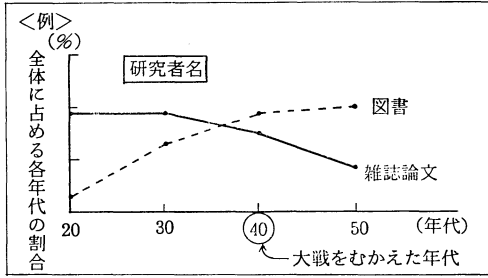
研究者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
図 書 (年代)	60	50	30	50	60	40	50	60	40	40	40	50	40
雑誌論文 (年代)	50	50	30	50	20	20	40	40	40	40	40	40/50	40

40歳代で最盛期をむかえており、30歳代で大戦の影響を受けた後、急激に発表件数を増していった例である。研究者B, Dは、40歳代で大戦をむかえ、50歳代が最盛期となっている。Aグループ全体では、大きな差ではないが、図書の方が、雑誌論文よりも高年令で発表していることがわかる。特に20歳～30歳代の若年期に焦点をあてれば、雑誌論文の方が高い割合を示している。

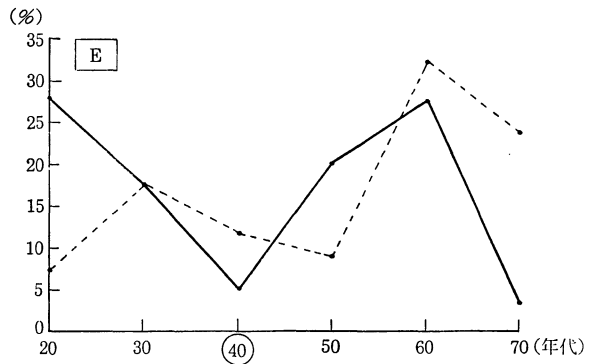
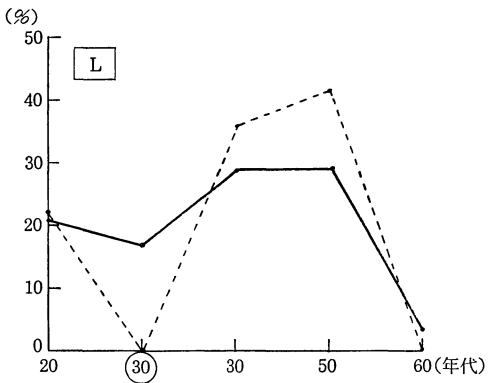
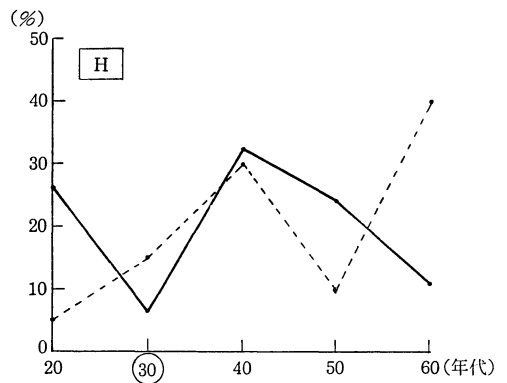
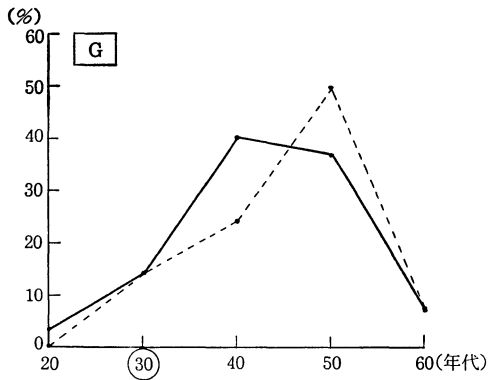
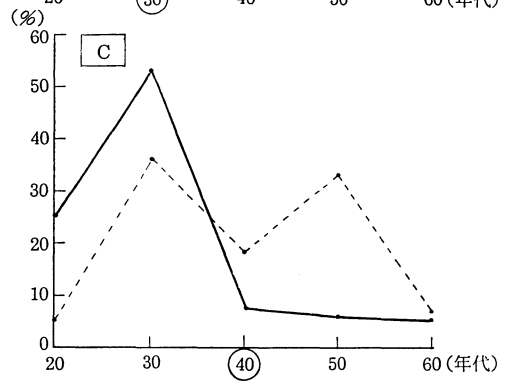
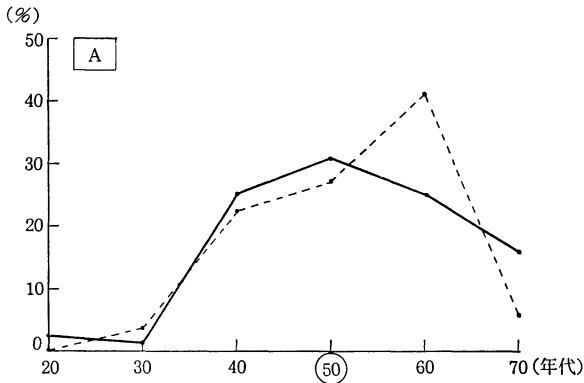
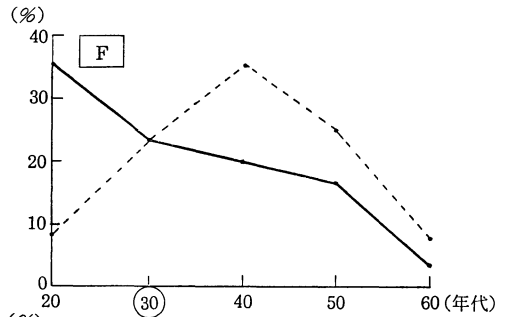
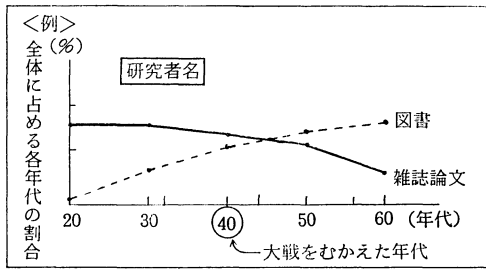
一方、Bグループ（第2図）では、全員が図書と雑誌論文の最盛期が異なり、全員が図書よりも、雑誌論文の発表最盛期を早くむかえている（但し、研究者Cは、図書の最盛期が30歳代と50歳代にあり、後のピークを取りあげた）。Bグループにおいても、研究者のほとんどが大戦の影響を受け、発表件数が減少している。しかし、研究者Aは、50歳代で大戦をむかえているが、大きな影響を受けていなかった。

A, B両グループとも、雑誌論文の発表件数は、年令が高くなるほど減少している。一方、図書では、全員が40歳代以上で最盛期をむかえ、60歳代～70歳代でもその割合は急激に減少していない。特に分析データが、60歳代以後の研究歴をカバーしていない研究者については、60歳代以降に急激な発表件数の減少があったかのように見えるが、実際は、70歳代までもカバーしている研究者のように、70歳代での減少は緩やかであると予測できよう。

国文学研究における発表メディアの特徴

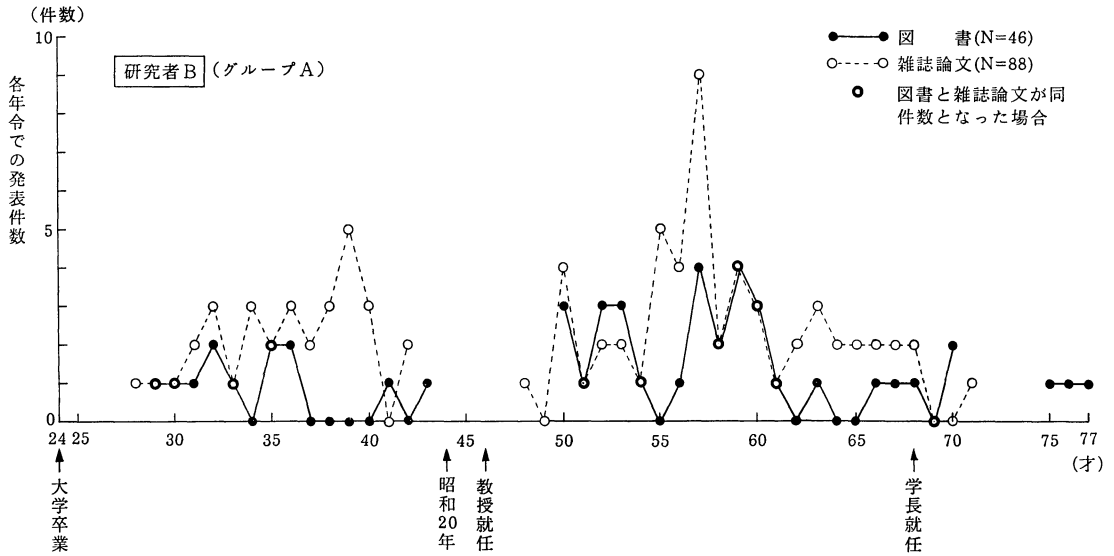


第1図 A グループ

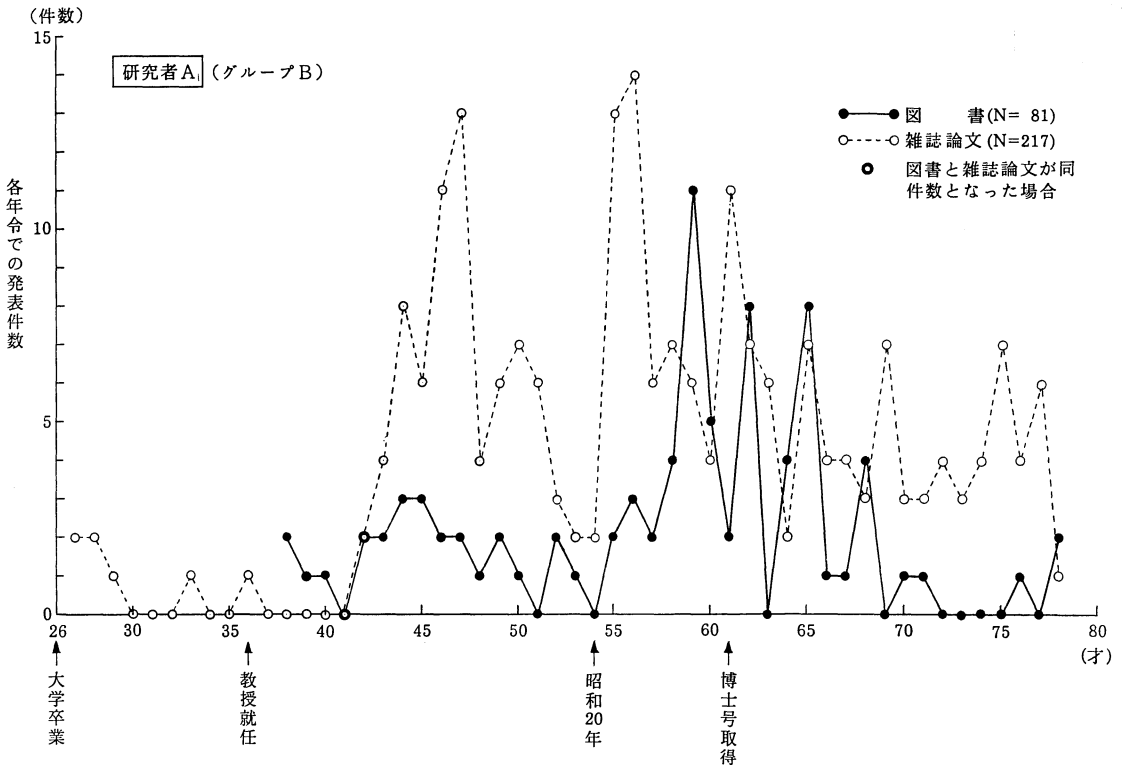


第2図 Bグループ

国文学研究における発表メディアの特徴



第3図 Aグループの一例 (研究者Bの場合)



第4図 Bグループの一例 (研究者Aの場合)

2. 研究者AとBの例

次に、A、B両グループから1人づつ研究者を選び、さらに詳しい分析を行なった。各研究者の年令1歳ごとに、図書と雑誌論文の発表件数を示したものが、第3図(Aグループの研究者B)と第4図(Bグループの研究者A)である。

Aグループに属する研究者Bは、私立大学を卒業した後、母校で長年教鞭をとり、文学部長にも就任した。さらに母校を退職後、私立の短期大学に移り、学長にも就任した。一生涯、万葉集と和歌の研究を続けた。図書発表件数の約46%にあたる21冊を、50歳代で発表していることがわかる。しかし、そのほとんどは分担執筆であり、実際にはもっと少ない冊数となろう。雑誌論文は、全体の約40%を50歳代で発表している。研究者Bの場合、50歳代で図書と雑誌論文両方の発表最盛期をむかえていたが(第1図参照)、第4図で詳しく見ると、雑誌論文の方が、図書よりも早く発表され、早く活発な時期をむかえていることがわかる。

一方、Bグループに属する研究者A(第10図参照)は、旧帝国大学を卒業した後、他の旧帝国大学に所属し、64歳で退官した後、私立大学に所属している。この間に、61歳で博士号を取得している。研究者Aは、50歳代で雑誌論文の発表最盛期をむかえ、60歳代で図書の最盛期をむかえている。27歳で初めて雑誌論文を発表し、40歳代から論文を多く発表し、60歳代で少なくなっている。図

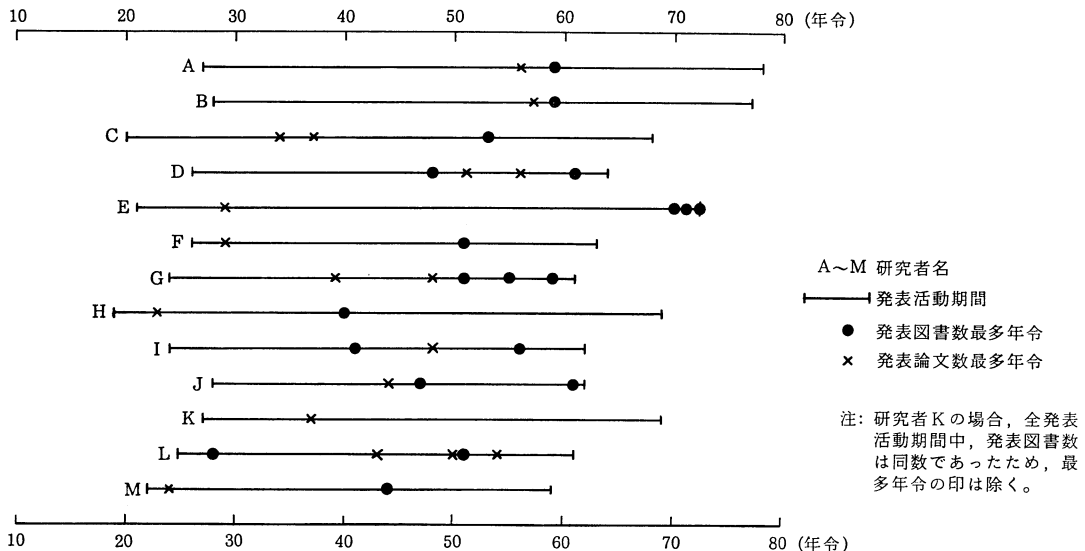
書は、38歳で初めて発表し、59歳から65歳の間まで、多くの図書を発表しつづけている。このように初めて発表した年齢が遅い場合には、最盛期も他の研究者と比べて遅くむかえるといった例である。70歳代で雑誌論文の発表が、年間5件前後もあるのは、学会誌への発表が継続していたためと、第2の勤め先である私立大学の大学紀要への発表を行なったためである。大戦の影響が顕著である例でもある。

3. 研究者別発表図書数・論文数最多年齢

ここでは、研究者13名全員について、年齢1歳ごとに、発表件数を数え、最も件数の多かった年齢を調べることから、年代による最盛期(第2表参照)との差異がないかを確認した。研究者別発表図書数、論文数最多年齢を示したものが、第5図である。個人差はあるものの、全体的な傾向としては、若年で雑誌論文を多く発表し、40歳代後半以降で図書を多く発表していることがわかる。図書と雑誌論文の発表最盛期が同年代であった研究者B、J、M、(第1図参照)も、第5図では、雑誌論文の方が図書よりも若年で、最多年齢をむかえている。

4. 雑誌論文の発表先

研究者13名のうち、発表論文数が最も少ない場合でも、44論文を発表していた。また、最高では、217論文も一生涯に発表していた。そこで、各年代ごとに、どの



第5図 研究者別発表図書数・論文数最多年令

## 国文学研究における発表メディアの特徴

様な雑誌に最も多く論文を発表しているかについて調べることとした。その際、以下のような種類に雑誌を分類した<sup>8)</sup>。

### ①大学紀要

複数の学部学科を持つ大学、短期大学で、全学部対象に刊行される逐次刊行物。

### ②学部紀要

大学・短期大学の国文学科、国文学研究室、国文学の指導にあたっている教授のゼミ単位で刊行している逐次刊行物を学部紀要とする。例：「三田国文」。

### ③学会誌

国文学関係の学会が編集あるいは刊行している逐次刊行物（付表1参照）。例：「解釈」（解釈学会発行）。

### ④商業出版誌

商業出版社が刊行している逐次刊行物。例：「解釈と鑑賞」（至文堂発行）。

### ⑤その他

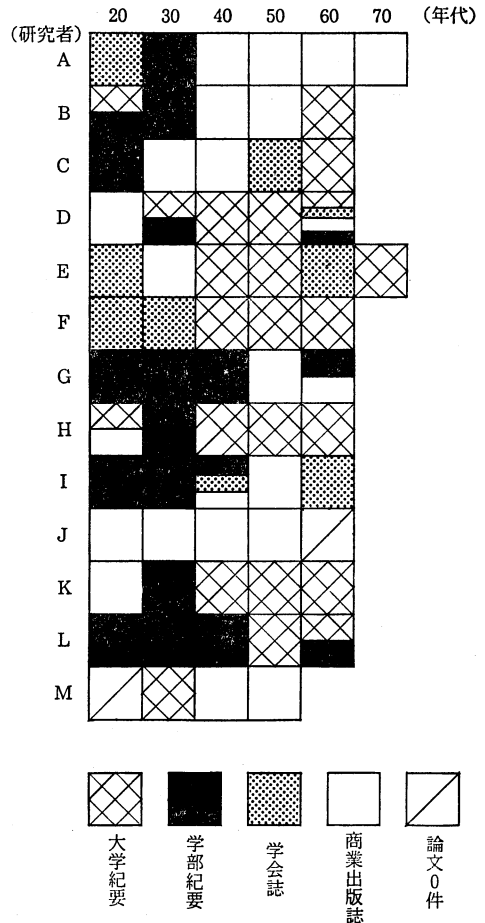
研究会、同好会が刊行している逐次刊行物。（記念論文集や国文学以外を対象とする雑誌もここに含めた）。例：「文学と教育」（文学と教育の会発行）。

以上の雑誌の分類をもとに、各研究者の各年代における最多論文発表誌を图示したものが第6図である。学部紀要への発表が20歳～30歳代で多く、逆に大学紀要が40歳代以降で多いことがわかる。学会誌、商業出版誌は、各年代に分散していることがわかる。

## C. ケーススタディにおける主要な結果

以上の調査1では、研究者13名を対象に、各研究者ごとにその発表活動を、発表メディアを通して調査を行った。その結果、国文学研究における発表メディアの特徴の手がかりとして、以下の4点が明らかにされた。

- (1) 研究者13名は、発表メディアとして、図書と雑誌論文を多く用いていた。
- (2) 研究者別に各年代ごとの発表図書数、雑誌論文数を調査した結果、図書よりも雑誌論文の発表最盛期の方が、若い年代であることがわかった。
- (3) さらに、各研究者別に1歳ごとの発表図書数、雑誌論文数を数え、各々が最も多く発表された時点での研究者の年齢を調べた結果、(2)と同様に、図書よりも雑誌論文の方が、最多年齢が若いことがわかった。
- (4) 論文の発表先を、各研究者の各年代ごとに調べた結果、20～30歳代で最も多く論文を発表する雑誌が学部



第6図 研究者別各年代における最多発表誌

紀要、40歳代後半から多く発表する雑誌が大学紀要であることがわかった。また、年代に限らず、各年代でよく論文を発表する雑誌として、学会誌や商業出版誌があることもわかった。

以上の4点が、国文学研究者13名を対象としたケーススタディで得られた発表メディアの特徴に関する手がかりであった。

## III. 国文学研究における発表メディアに関する調査2：全体調査

調査2では、国文学研究文献を対象として、国文学研究における発表メディアの実態を把握し、その結果からその特徴を考察しようとするものである。しかし、先行研



究の少ない分野であるため、基礎となるデータが不足していた。そこで、調査1で、13名の研究者の研究歴を個別に調査した。13名の研究者が古稀、退官にあたって、記念論文集が出版されるという環境下にある特定の研究者グループであることは、考慮に入れねばならないが、13名の個別調査から明らかにされた点は、国文学研究全体についても同様に言える可能性があると考えられよう。従って、調査2では、調査1の結果をもとに、主に以下の2点を明らかにすることを目的とした。

- ① 図書と雑誌論文を各々発表した時点での、研究者の平均年齢に差があるか。
- ② 雑誌論文の発表先である4種の雑誌（大学紀要、学部紀要、学会誌、商業出版誌）において、論文発表時点での研究者の平均年齢に差があるか。

以上の2点の他に、前提として、国文学研究文献数、国文学研究関係図書の出版社数、国文学研究関係雑誌数について調査し、国文学研究者にとって、発表の場ほどの程度存在するかを明らかにした。

## A. 調査方法

### 1. 国文学研究文献に関する調査

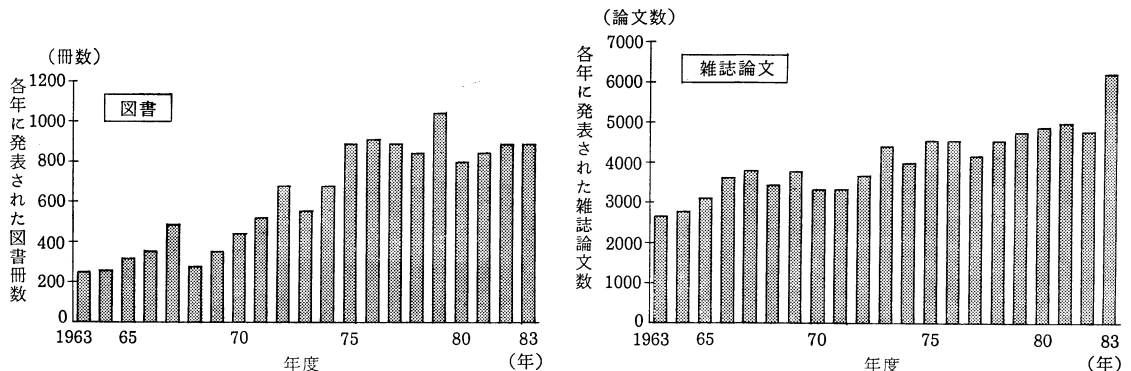
ここでは、①国文学研究文献数、②国文学研究関係図書の出版社数、③国文学研究関係雑誌数について、「国文学年鑑」<sup>4)</sup>の収録データを用いて調査した。①に関しては、「国文学年鑑」の1963年版（第1巻）から最新版である1983年版（第21巻）までを用いた。②、③については、1983年版を用いた。また、①の文献数については、「国文学年鑑」の図書の部、雑誌論文の部の各ページを数え、1ページあたりの平均掲載件数をもとに、各

年別の件数を概算した。②についても同様に、「国文学年鑑」の出版社一覧のページ数を数え、出版社数を概算した。③の雑誌数については、本論文のII章B節4. “雑誌論文の発表先”で用いた雑誌の分類（大学紀要、学部紀要、学会誌、商業出版誌）を用いて、「国文学年鑑」の収録誌一覧に記載されている発行者名、発行地をもとに、収録誌を分類した。

### 2. 各発表メディアにおける発表時点での研究者の年齢構成

ここでは、図書、雑誌論文の各々を発表した時点での研究者の平均年齢を、「国文学年鑑」の収録データを対象に調査した。まず、「国文学年鑑」の1963年版と1964年版、1973年版と1974年版、1982年版と1983年版、の3時点から、図書211件、雑誌論文298件、合計509件の文献を無作為抽出した。次に、この文献が発表された時点での研究者の年齢を調べた<sup>5)</sup>。その結果、509件のうち382件の文献を発表した研究者の年齢が判明した。なお、図書16件、雑誌論文7件が複数の著者によって発表されていたが、単独著者と同様に扱い、すべての著者を対象とした。そのため、実際の対象は、図書202件、雑誌論文223件、合計425件であった。

この425件について、以下の4項目を調査した。すなわち①文献全体（425件）についての、発表時点での研究者の年齢構成、②文献全体を図書と雑誌論文に分け、各々についての、発表時点での研究者の年齢構成、③図書202件を、著者の役割によって、執筆（156件）と編集（46件）とに分け、各々についての、発表時点での研究者の年齢構成、④雑誌論文223件を、その収録誌の種類（大学紀要、学部紀要、学会誌、商業出版誌）によって分



第7図 各年別図書冊数・雑誌論文数 (1963年—1983年)

国文学研究における発表メディアの特徴

け、各々についての、発表時点での研究者の年齢構成を調べた。

B. 調査結果

1. 国文学研究文献に関する調査結果

① 国文学研究文献数

第7図は、図書と雑誌論文の各年ごとの件数を示したものである。数値は、あくまで概算ではあるが、1983年に発表された図書は、約900件、雑誌論文は約6,500件であった。両者とも、1963年以降増加傾向を示しており今後も増加傾向が続く可能性は高いと言えよう。

② 国文学研究関係図書の出版社数

1983年における国文学研究関係図書の出版社数は約230社であり、日本の出版社全体の約8%であった<sup>6)</sup>。

③ 国文学研究関係雑誌数

1983年における国文学研究論文の収録雑誌数は、合計914誌であった。その内訳を示したのが、第3表である。大学紀要が、全体の約60%を占めていた。大学紀要559誌は、1983年度における大学、短期大学989校がすべて大学紀要を発行していると想定すれば、その約57%を占めることになる<sup>7)</sup>。

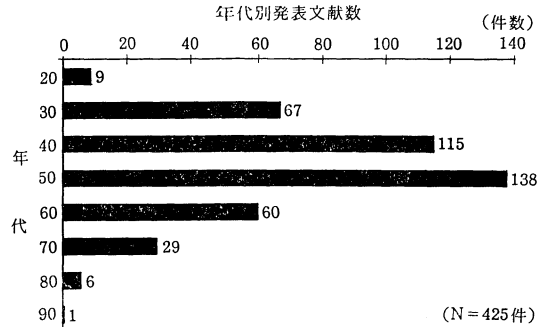
第3表 国文学関係雑誌の種類別内訳

	大学 紀要	学部 紀要	学会 誌	商業出 版誌	その 他	計
タイトル 数 (%)	559 (61.2)	142 (15.5)	46 (5.0)	57 (6.2)	110 (12.0)	914 (100.0)

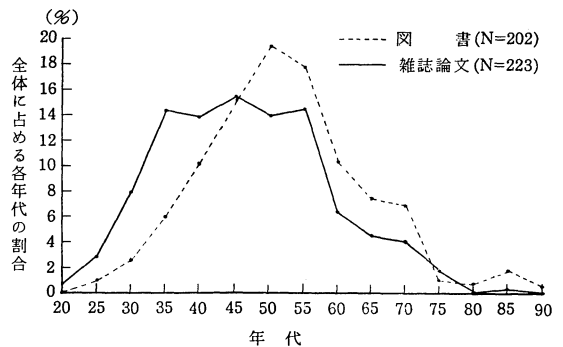
しかし、雑誌論文の単位で考えるならば、その収録誌の割合は異なってくる<sup>8)</sup>。つまり、大学紀要のように件数は多いが、1年間に掲載される国文学研究論文数は、国文学研究関係論文のみを掲載する学部紀要や学会誌に比べて少ない。さらに、月刊で発行される商業出版誌と比べれば、非常に少ないと言えよう。但し、1論文のページ数では、商業出版誌は2~3ページのものが多くあるのに対し、大学紀要は30ページ程度のものが普通である<sup>9)</sup>。

2. 各発表メディアにおける発表時点での研究者の年齢構成

① 文献全体についての発表時点での研究者の年齢構成  
文献全体425件について、その発表時点での著者の年齢を調べ、各年代の件数を調べたものが、第8図である。著者が50歳代(50~59歳)の時点で発表した文献



第8図 文献発表時点における研究者の年齢構成



第9図 図書・雑誌論文発表時点における研究者の年齢構成

数が最も多く、138件で全体の約32.5%であった。全体の平均年齢は、51.4歳であった。425件の著者のうち、最年少であった研究者は23歳で、その年に雑誌論文を発表していた。最年長の研究者は92歳で、図書の編集にあっていた。研究者が20歳代で発表していた9文献のうち、8文献までが雑誌論文であった。80歳代と90歳代で発表していた7文献のうち6文献までが図書であり、さらにその6文献のうち、4文献が編集を担当していたものであった。

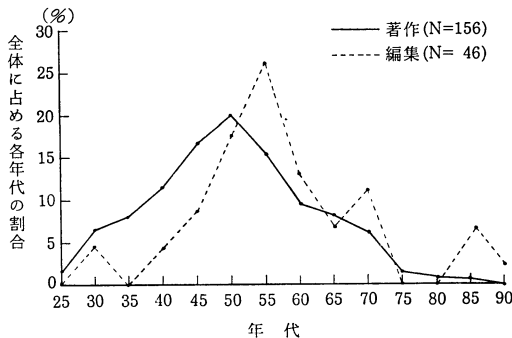
② 図書と雑誌論文についての発表時点での研究者の年齢構成

第9図は、図書(破線)と雑誌論文(実線)の各々について、全体に占める各年代の割合からなる年齢構成を示したものである。図書の場合、50歳代前半(50~54歳)を頂点に50歳以上の年齢で発表した割合の方が、50歳以下で発表した割合よりも多い。一方、雑誌論文では40歳代後半(45~49歳)に頂点があり、50歳以下での発表の割合の方が、50歳以上での発表の割合よりも多い。平均年齢は、図書54.4歳、雑誌論文48.7歳で、図

書と雑誌論文との平均年齢の差は、約6歳であった。最年少は、図書29歳、雑誌論文23歳、最年長は図書92歳、雑誌論文88歳であった。

③ 執筆と編集についての発表時点での研究者の年齢構成

第10図は、執筆(実線)と編集(破線)の年齢構成を示したものである。執筆の場合は、50歳代前半が最も高

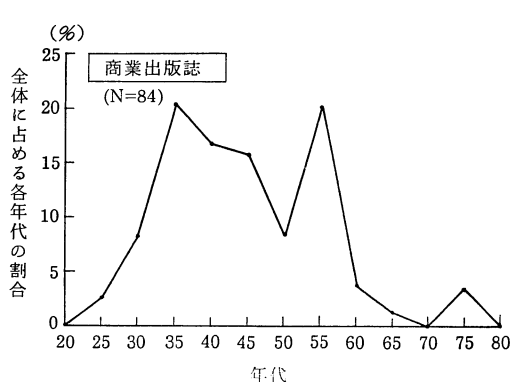
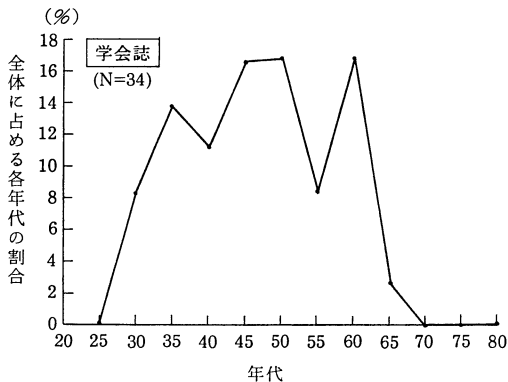
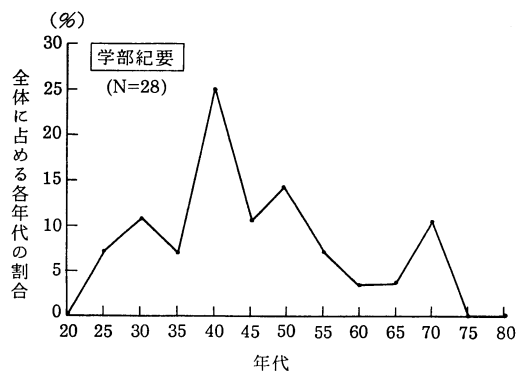
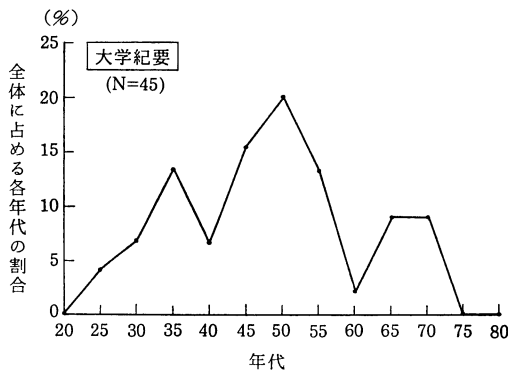


第10図 執筆・編集における研究者の年齢構成

い割合を示し、平均年齢は53.0歳であった。一方、編集の場合は、50歳代後半が最も高い割合を示し、平均年齢は執筆よりも6.5歳高い59.4歳であった。

④ 各収録誌についての発表時点での研究者の年齢構成  
第11図は、雑誌論文の収録誌である4種類の雑誌各々についての年齢構成を示したものである。大学紀要は50歳代前半が最も割合が高く、40歳代前半と60歳代前半で減少している。学部紀要は40歳代前半が最も割合が高く、60歳代の割合が低くなっている。学会誌は、ピークが複数あり、また、最年少が32歳、最年長が65歳で4種類の雑誌の中で最も年齢の幅が狭い。一方、商業出版誌は複数のピークを持つ点では、学会誌と同じであるが、最年少が25歳、最年長が79歳で、最も年齢の幅が広い。各誌の平均年齢は、大学紀要50.0歳、学部紀要47.3歳、学会誌48.9歳、商業出版誌46.7歳で、各誌の平均年齢には、約1歳から3歳の差があった。

C. 各発表メディアにおける発表時点での研究者の平均年齢の差



第11図 雑誌論文出版時点における研究者の年齢構成の割合

## 国文学研究における発表メディアの特徴

ここでは、調査2の目的であった、図書と雑誌論文、および4種類の雑誌間での、発表時点における研究者の平均年齢の差について考察を行なう。

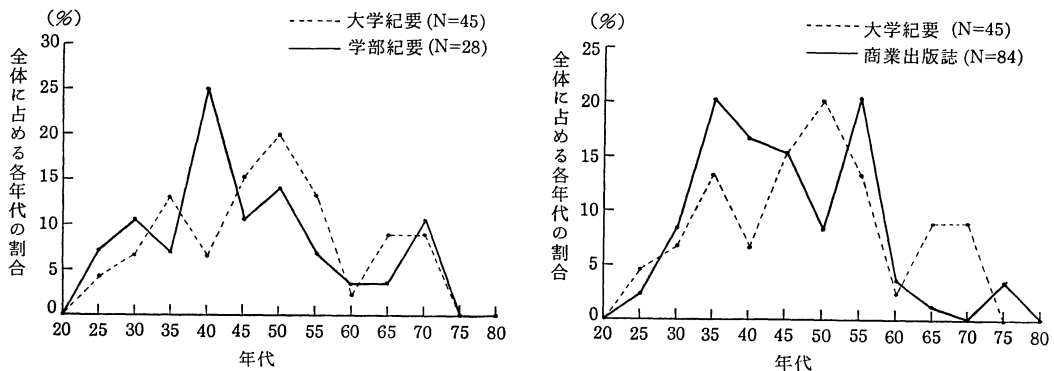
### 1. 図書と雑誌論文との発表時点における研究者の平均年齢の差

図書を発表した時点での研究者の平均年齢は、54.4歳、一方、雑誌論文では48.7歳であった。両者の差は、約6歳であった。また、最年少の研究者は、雑誌論文を発表しており、最年長の研究者は、図書を発表していた。全体的に、雑誌論文の方が、図書よりも、若い年代で発表されていることが明らかにされた。この理由の一つとして考えられるのは、雑誌論文は比較的短くても発表できるという量的な理由である。一方、図書は、論文であらわし切れない大きな問題を取り扱う場合に利用される<sup>9)</sup>。この大きな問題を扱うためには、その前提として原典を詳しく、深く読むことが、国文学研究においても重要な作業である<sup>9)</sup>。この作業には、長年の思索も必要とされ、研究歴の浅い研究者はその途上にあると言えよう。従って、若手の研究者の方が、高年齢の研究者よりも多く論文を発表の場として利用することになる。

しかし、高年齢の研究者が、まったく雑誌論文を発表の場として用いなくなるというのではなく、70歳代においても、雑誌に論文を発表しつづけている研究者も存在した(第9図参照)。これは、ひとつには、人文科学分野の研究者の活動期間が、他の分野と比べて長いためとも考えられる<sup>10)</sup>。実際にも本論文の調査1(ケーススタディ)の対象となった13名の研究者の中には、雑誌論文を高年齢で発表していた研究者が多く存在した(第1, 2図参照)。もう一つの理由として考えられるのは、雜

誌論文を研究成果を部分的に発表する場として利用し、雑誌論文が多数発表されたのち、それらをまとめて図書として発表するために、雑誌論文が図書に先行して発表されてゆくためと考えられる。つまり高年齢でも研究活動を続けている研究者は、研究成果の部分的な発表を続けているとも考えられよう。また、図書の出版は“経費と販売の面で、出版者がなかなか引き受けてくれない”<sup>9)</sup>ために、“論文の形で雑誌などに発表したものを、再びまとめて一冊の研究書の形にする”<sup>9)</sup>といった妥協策の結果、雑誌論文が発表されているためでもある。

ところで、国文学研究における雑誌論文と図書との関係は、他の分野とは異なると考えられる。なぜなら、自然科学のように、雑誌論文に発表された最新の研究成果が、次第にその学界に定着し、認められ、それを広く一般人に普及させるために、テキストとして図書の形態で再び発表される場合とは異なるからである。自然科学分野では、その分野での複数の研究者による多くの成果が積み重なり、まとめられて、凝縮されて図書(テキスト)となる<sup>11)</sup>。一方、国文学研究者は、自分が若年の頃から雑誌論文に部分的に発表してきた内容を基礎として、さらに修正、加筆(書きおろし)を行ないながら、大部な内容にまとめてあげ、その発表の場として図書を用いていると言えよう。このような分野間での発表メディアの持つ意味の違いは、その分野間の研究活動の違いを反映するものであろう。国文学研究において言えば、長期間の研究活動の間に、研究成果の発表が図書と雑誌論文とに配分されながら、その内容自体は積み重なってゆくとするれば、雑誌論文も図書と同様に重要な発表メディアと言えよう。



第12図 雑誌論文発表時点における研究者の年齢構成(種類別比較)

## 2. 4種類の収録誌における論文発表での研究者の平均年齢の差

図書と雑誌論文とに発表配分が行なわれるとすれば、論文の発表先である雑誌の中でも発表配分が行なわれているとも考えられよう。その結果が、4種類の雑誌における年齢構成を示したグラフの違いとなって表われたとも言えよう(第11図参照)。

そこで、さらに詳しい分析をするために、雑誌間の年齢構成の比較を行なった。

### ① 大学紀要と学部紀要(第12図左参照)。

この2種類に共通していたのは、60歳代で下降し、70歳代でまた上昇を示していることであった。これは、60歳代でそれまで所属していた国立大学を退官し、その後他の私立大学へ再就職し、その大学で発表活動を続ける研究者がいるためとも考えられる。このような傾向は、発表者を大学所属者だけに限らず広く集めている商業出版誌や学会誌には見られないものであった。一方、大学紀要と学部紀要との違いは、大学紀要への論文発表のピークが50~54歳であるのに対して、学部紀要への発表ピークは40~45歳と比較的若いことであった。これは、学部紀要が、国文学研究者の発表の場として自主的に作られているため、若手の研究者にも発表の機会が与えられていることと、一方、大学紀要が、大学での国文学科の評価を受ける場でもあり、また、ページ数が、他の雑誌に比べて長く、ある程度まとまった研究成果を持った比較的研究歴の長い研究者が発表する場であるためと考えられよう。

### ② 大学紀要と商業出版誌(第6図右参照)。

この2種類の雑誌における年齢構成の違いは大きい。特に、40歳代から50歳代という研究活動が盛んな年代(第8図参照)において、逆の動きを示している。これは、大学紀要の場合には、大学所属の研究者が、国文学科で中堅となり、学科の代表として大学紀要に多く論文を発表するためと考えられよう。一方、商業出版誌は、雑誌の販売面を考慮して、編集委員が興味を引くテーマを前もって設定し、そのテーマを研究している研究者に依頼した結果、論文が発表されているために、特にある年代に限って、多く論文を発表するという事は起こらないと考えられる。そのため、年齢構成は分散している。この傾向は、調査1(ケーススタディ)においても顕著に見られた(第6図参照)。

以上のように、雑誌間の年齢構成の差は、各種の雑誌が、運営主体や、投稿あるいは依頼原稿の違いなどを反

映した結果と言えよう。従って、図書と雑誌論文の場合のように、発表メディアの種類ごとに発表配分が行なわれているとは考えにくい。むしろ、研究者は、発表しやすい雑誌を探し求めながら、発表メディアの特徴に従って、発表活動を行なっていると言えよう。

## IV. おわりに

今回の調査では、国文学研究の発表メディアとして、図書と雑誌論文(あるいは雑誌)を対象に選んだが、この他にも、学会発表などが存在する。研究成果を、まず学会発表し、次に雑誌論文にまとめ、さらに図書という大部な著作へと積みあげてゆくといった流れについて、発表メディアの変遷といった観点あるいは研究成果の内容の変化といった観点から、さらに詳しい調査が必要であろう。

- 1) Stone, Sue. "Humanities scholars; information needs and uses". *Journal of Documentation*. Vol. 38, No. 4, p.292-313 (1982).
  - 2) Corkill, C; Mann, M. "Information needs in the humanities; two postal surveys". Sheffield, Centre for Research on User Studies, University of Sheffield, 1978. 135 p. (BLR & DD Report No. 5455, CRUS Occasional Paper No.2) なお、人文科学分野における引用文献分析をまとめたものとして、Bebout, L. et al. "User studies in the humanities; a survey and a proposal". *RQ*. No. 15, p.40-44 (1975). がある。
  - 3) 日本図書館協会編. "学術雑誌; その管理と利用". 東京, 日本図書館協会, 1976. 399 p. を一部参考にした。
  - 4) 国文学研究資料館編. "国文学年鑑". 昭和38-, 年刊. 東京, 至文堂, 1965-.
- この年鑑は、当該年間に発表された国文学研究関係の研究文献を収録している。収録文献は、所蔵資料の他に、国立国会図書館等の他館所蔵資料を含め、網羅的に収録されたものである。なお、資料名の変遷などについて詳しく解説したものとして、田澤恭二. "雑誌記事索引としての「国文学年鑑」". もりきよし先生喜寿記念会編. 知識の組織化と図書館. 東京, 1983. p.397-411. がある。
- 5) 著者の年齢判定について用いた二次資料は、以下のとおりである。
 

大学研究者研究課題総覧	1958, 61, 71年版
研究者研究課題総覧	1979, 84年版
大学職員録	1963~84年版
国語国文学者名簿総覧	1983年版
現代日本執筆者大事典	1977/1982年版

 以上の資料で判明しない場合には、現物調査を行な

国文学研究における発表メディアの特徴

- った。
- 6) 出版ニュース社編。“出版年鑑”。1983年版。東京，1984。1775, 272 p. これに収録されている日本の出版社は、約3,000社であった。
- 7) 文部省。“学校基本調査報告書；高等教育機関編”。昭和58年度。東京，大蔵省印刷局，1984。463 p.
- 8) 雑誌の件数から調査した結果と、研究論文を「国文学年鑑」から無作為抽出し、その収録誌を分析した結果との比較である。雑誌の件数自体は非常に少なかった商業出版誌の場合、論文の収録誌としては、

- 約26%を占めるまでになっている。(付表2参照)
- 9) 内野吾郎。“日本文芸研究法；芸文学の方法序説”。東京，桜楓社，1972，289 p.
- 10) 文部省学術国際局情報図書館課。“我が国における学術研究活動の状況”。学術月報。Vol. 33, No. 2, p. 58-84 (1980).
- 11) Subramanyan, K. “Scientific literature”. Kent, A. et al. eds. Encyclopedia of Library and Information Science. Vol. 26, New York, Marcel Dekker, 1979. p. 376-548.

付表 1：国文学関係学会・学会誌一覧

学会名	人数	学会誌	発行頻度
解釈学会	908	解釈	年12回
国語学会	1948	国語学	年4回
古事記学会	371	古事記年報	年1回
古代文学会	250	古代文学	年1回
上代文学会	473	上代文学	年2回
昭和文学研究会	365	昭和文学	年2回
説話文学会	490	説話文学研究	年1回
全国国語教育学会	537	国語科教育	年1回
全国大学国語国文学会	1342	文学語学	年3回
中古文学会	1105	中古文学	年2回
中世文学会	794	中世文学	年1回
日本演劇学会	378	日本演劇学会紀要	年1回
日本キリスト教文学会	186	————	————
日本近世文学会	612	近世文芸	年2回
日本近代文学会	1043	日本近代文学	————
日本口承文芸学会	377	口承文芸研究	年1回
日本児童文学会	182	児童文学研究	年1回
日本比較文学会	529	比較文学	年1回
日本文学協会	1265	日本文学	年12回
日本文学風土学会	157	日本文学風土学会記事	————
日本文芸研究会	547	文芸研究	年3回
俳文学会	543	連歌俳諧研究	年2回
表現学会	283	表現研究	年2回
万葉学会	756	万葉	年4回
美夫君志会	668	美夫君志	年2回
和歌文学会	725	和歌文学研究	年1~2回

付表 2：国文学研究論文収録誌の内訳（比較）

	大学 紀要	学部 紀要	学会 誌	商業 出版誌	その 他
調査結果* (N=914)	61.2%	15.5	5.0	6.2	12.0
サンプリング** (N=103)	27.2%	20.4	10.7	26.2	15.5

\*) 本文Ⅲ章B節1—①に記載した国文学研究関係雑誌数。

\*\*) 「国文学年鑑」1982年，1983年版からサンプリングした論文をもとにしたデータ。

出典：教育出版センター編集部編。“国語・国文学者名簿総覧”。昭和57年版。東京，教育出版センター，1981。666 p.